

かみすげたささのおか

令和4年12月23日
上菅田笹の丘小学校
学校だより1月号



上菅田笹の丘小学校 学校教育目標
自分大好き 仲間大好き
心かがやく上菅田笹の丘小学校



「ワールドカップから学んだこと」

校長 世古 正樹

朝の寒さはとても厳しくなり、登校してくる子どもたちも、手袋をしてマフラーを巻く子が増えてきました。そんな寒い朝ですが、校門に立っているとたくさんの子が「おはようございます。」と元気よく挨拶をしてくれたり、笑顔を見せてくれたり、会釈をしたりしてくれるので、寒さも忘れて爽やかな気持ちになります。

さて、アルゼンチンの優勝で幕を閉じたサッカーワールドカップカタール大会、ドイツやスペインという強豪国を破ってグループリーグを首位で突破した日本代表の戦いに、感動や勇気をもたらした方も多かったのではないのでしょうか。残念ながら今回もベスト8に進むことはできませんでしたが、自分も子どものときからサッカーをやっていて、ドーハの悲劇（1993年、試合終了直前に同点ゴールを決められ、ワールドカップ初出場を逃す）は生放送で見ていたので、今回のワールドカップは今まで以上に期待がふくらみ、感動も大きかったです。今回の日本代表の試合では、私たちを感動させてくれるたくさんの学びがありました。

<あきらめない心>

世間ではドイツやスペインという強豪国と同じグループになり、グループリーグ突破は無理という声が多かったのですが、選手たちは「絶対に勝つ」というあきらめない強い心を全員がもっていました。

<信じる力>

予選ではなかなか良い結果が得られなかったのですが、監督はかなり批判を浴びましたが、選手たちは監督を信じ、自分たちのやってきた練習の積み重ねを信じ、その信じる力が強豪国を破る原動力となりました。

<仲間との絆>

ゴールを決めた選手は、必ずベンチに向かって走っていき、控えの選手たちと抱き合っ、満面の笑みで喜びを分かち合っていました。先発も控えもないチームとしての一体感が伝わってきました。

この絆は、選手同士だけではなく、監督と選手の間でもとても深かったということが、帰国後の記者会見で分かり、さらに感動しました。記者会見である記者が森保監督に「PKの順番は監督が決めたのではなく、選手に決めさせたのですか？」という少々意地の悪い質問をしました。監督は「今までも選手の立候補だったのでそうしたのだが、選手に責任を負わせるべきではなかったかもしれない。」と答えました。すると、吉田主将が「ちょっといいですか。僕たちは東京オリンピックの準々決勝の時、そのやり方で勝っている。僕たち選手は、このやり方が間違いだとは思わない。全部、結果論じゃないかな。」と監督をフォローする発言をしました。この発言に、吉田主将と森保監督の深い信頼関係を感じました。この信頼関係があるからこそ、自分たちのやり方を信じ、あきらめない心をもつことができたのだと思います。別の選手の話によると、森保監督はこれまでの日本代表の試合後、ホテルから自分のチームに戻っていく選手を、必ず見送ったそうです。海外に戻る選手は、乗る飛行機がみんな違い、深夜出発の便もあったそうですが、そんな時も必ず一人ひとりを見送っていたそうです。この相手を思いやる心遣いが選手との絆を深め、一体感のある強いチームをつくっていったのだと思いました。校長である自分自身、森保監督から学び、教職員との絆を深めて、一体感のある学校づくりにさらに努めていきたいと思えます。

明日から冬期休業が始まります。今年は暦の関係で17日間という長い休みとなります。年末年始、子どもたちにはご家庭の皆様との時間を大切にして、安全安心な毎日を過ごして欲しいと思います。今年1年、保護者の皆様、地域の皆様には、本校の教育活動にご理解、ご協力をいただき、誠にありがとうございました。来年も、子どもたちにとって、皆様にとって、豊かな良い1年になることを心から願っております。令和5年も、どうぞよろしくお願い申し上げます。